

意志ある

とろろ

道は

ひらく



看護師から建築家になった戸倉蓉子さん。アナウンサーから弁護士になった菊間千乃さん。ともに

未知のフィールドに果敢に挑み、見事に転身を果たしてきた意志の人である。自らの志に従ってユニークな人生を歩んでこられたお二人に、各々の原点や転機を交えながら、志を立て、それを全うする上で大切なことを語り合っていた。

弁護士 菊間千乃 対談 戸倉蓉子 ドムスデザイン社長

きくま・ゆきの — 東京都生まれ。平成7年早稲田大学法学部卒業。フジテレビ入社。入社4年目、番組の中継中に5階建てのビルから転落、腰椎圧迫骨折の重傷を負う。在職中に夜間ロースクールに通い司法試験の勉強を始め、19年フジテレビ退社。23年弁護士に。現在も仕事の傍ら、早稲田大学先端法学専攻知的財産LLMで勉強を続けている。著書に『私が弁護士になるまで』『文藝春秋』などがある。

とくら・ようこ — 福島県生まれ。看護師として慶應義塾大病院に勤務中、人間は環境で生き方が変わることを悟り建築家を志す。リフォーム会社を経て、平成3年プランニングファクトリー設立。イタリア留学後、11年ドムスデザインに社名変更。豊かなライフスタイルを実現する建物を追求する。28年ベトナムにドムスインターナショナル設立。著書に『いい家に抱かれなさい』『日経BPコンサルティング』などがある。

ともに小学生時代の夢を実現して

戸倉 菊間さんとはきょうが初対面ですけど、アナウンサーをなさっていた時によくテレビで拝見していました。その後弁護士に転じられたと知った時にはびっくりしました。すごい方だなあって。

菊間 いえいえ、そんなことありません、普通の人間ですから(笑)。フジテレビのアナウンサーになりたいたいというのは小学六年生の頃からずっと思っていて、卒業アル

バムにもそのことを書いたんです。おかげさまでその夢は叶ったんですけど、実際に十三年間働いてみて痛感したのは、報道はとても大事なことなんですけど、それを受けて世の中が変わっていくかどうかは、番組を見たお一人お一人に懸かっている。自分たちがやっているのはきつかけでしかないんだなっていうことでした。

そんな折にロースクールができて、働きながら弁護士になれるというので興味を持ったんです。弁護士の仕事って、当事者と直接関

わってその人を笑顔に変えていく仕事なので、現状に物足りなさを感じていた自分にはピッタリじゃないかなと思って、自然な流れでアナウンサーを辞めて弁護士になりました。あれからもうすぐ八年になります。

戸倉 実は、私も小学校の卒業文集に将来の夢を書いて、それを実現した後で別の道に進んでいるんですよ。

菊間 一緒なんですわ(笑)。いまは建築のお仕事をなさっていると伺いましたけど。

戸倉 社会に出て最初になったのは看護師でした。子供の頃からの夢だった慶應病院のナースになって、小児科の病棟に入ったんですけど、病院の環境があまりにも殺風景でした。何とか子供たちを元気づけてあげたいと思って「落書きのできる廊下にしませんか?」

「もっと植物を入れませんか?」って看護師長さんにいろいろ提案するんですけど「それは看護師の仕事ではありません」って相手にしてもらえない。だったら私が変わってやると思って建築の道を志すよ



うになったんです。

いまは女性スタッフ八人と一緒に、そこで過ごす方々が元気になるような病院や高齢者施設、マンションを手掛けています。一昨年にはベトナムにも会社をつくって、現地の病院づくりにも取り組み始めたところですよ。

建築の仕事って普通は大学で学んでから始めるもので、私のように人を元気にしたいという発想から入る人は少ないと思うんです。随分遠回りをしましたけど、私にとってはそこが重要で、ナースの経験があったからいまがあると思

っています。小学校の頃は、人を元気にできる人になりたいと包帯を巻く練習を一所懸命していましたけど、いまは環境で人を元気にし

たい。ですからナースであろうが建築家であろうが、やっていることは一緒のような気がするんです。

自立した女性への憧れが出発点

菊間 戸倉さんがそもそも看護師に興味を持たれたきっかけは、何だったのですか。

戸倉 ナイチンゲールの本を読んです。彼女のイギリス貴族だったんです。彼女がクリミア戦争へ行っ

戸倉さんは何か思い当たることはありませんか、そういう憧れを抱いたきっかけって。

戸倉 そうですね、私は福島県の田舎で育ったんですけど、隣のカタリックの幼稚園にどうしても行きたくて、一人では危ないから

ついていくっていう親を「来ないで」って振り切って、一人でバス通いをしていました。

菊間 すごい(笑)。なぜそのカタリックの幼稚園に行きたかったんですか。

戸倉 向上心のようなものがあつたのかなと思います。田舎に埋もれて遊んでいるよりは、もっと高みに触れてみたいというか。高校も親元から離れた女子校を選んで一人暮らしをしましたし、ナース

になる時もやっぱり日本一の病院がいいと思って慶應病院を選んだんです。子供の頃から挑戦するのが好きでした。

菊間 私も同じようなところがありました。なぜか考えてみると、私の原点は、スポ根アニメではないかと、『アタックNo.1』みたいな戸倉『アタックNo.1』は私も大好きでした(笑)。

菊間 昔はスポ根アニメって多か

築士、その次は一級建築士と、次に現れることを一つひとつやって

いっただけで。それは決して辛いことではなくて、挑戦したらこんな自分になれるって想像して楽し

ながらやってきました。その一番の原動力になっていたのは、ナイチンゲールの「女性よ、自立しなさい」という言葉でした。

若い時には自立ってどういうことなのかあまり分からなかったんですけど、自分で考えて自分で歩めることではないでしょうか。経済的なことだけじゃなくて、自分で考えた人生を進むことじゃないか

目標は具体的なほどいい

戸倉 菊間さんは、どんなきっかけがあってアナウンサーに興味を持たれたのですか。

菊間 もともとはアナウンサーというより、インタビュアーになりたかったんです。私は、父が有名な高校バレーボールの監督で、全国大会で優勝してはテレビでインタビューを受けているのを見て育ちました。

ある時二人の記者からインタビ

ューを受けているのを見ると、父は一方の人の質問には熱心に答えるのに、もう一方の人には全然喋らない。私が幼心に、差別だと言ったら、父は「あの二人は全然違う」と言うんです。

一人は普段からバレーボールのことを一所懸命勉強し、会場にも熱心に足を運んでくれていたから、いい記事を書いてほしいと思ってたくさん話したくなる。だけど、もう一人は会社から言われて来ているだけで、調べれば分かることも調べず的の外れな質問ばかりするから、そんな人に無駄な時間を使いたくないと。妙に納得しちゃったんです(笑)。

私の父は、昭和一桁生まれの頑固一徹みたいな人で、家でもほとんど話をしなかつたんです。そんな父を、自分の心掛け一つで饒舌にしてしまうインタビュアーの方が素晴らしいと思って、その仕事に興味を持ちました。父に認められたいという思いもベースにあつたんでしょね。それで高校バレーを毎年放送していたフジテレビのアナウンサーになりたいと思うようになりました。

戸倉 具体的には、どのようにし

てフジテレビに入られたのですか。

菊間 アナウンサーには早稲田大出身の方が多かったんで、早稲田に入れば、夢に近づけると思っていました。

当時早稲田は人種のあるつぼと

わかっていて、これまで出会ったことのない面白い人がたくさんいる場所と

場所と期待して入ったんですけど、学

習してみたら期待ほどではなくて、こんな所にいたらダメだと思っ

て授業にはほとんど出ずにアルバイトばかりしていました。

私のバイト選びの基準は大学生がいらないバイト。アナウンサーになったら、いろんな方にインタビュ

ーするだろうから、その時に備え、いろんな人に会っておこうと思

ったんです。出稼ぎのおじさんに交

じて警備の仕事をしたり、イベント

コンパニオンの仕事で渋谷で寝泊まり

している子たちと接したりして、自分と全く違う世界の人たちとコミュニケーションを取

ってきた経験が、アナウンサーにな

ってからですごく役に立ちました。

戸倉 明確な志を抱いて、それを

確実に叶えてこられたのは素晴らしいことですね。

菊間 目標は具体的であればある

かったんです。

ナースから建築家を目指した時も、建築の仕事バリバリやっている自分をイメージしながら試験勉強をやりましたし、イタリアで建築の勉強をしようと思ったなら、ビックリするくらい早くイタリア語をマスターできたんですね。やっぱり明確な目標があったら、そのための努力も楽しんで打ち込めると思っています。

未経験の建築業で 独立を果たす

菊間 戸倉さんは、建築家へ転身なさるまで、どのくらいナースをなさっていたのですか。

戸倉 二年半です。先ほどお話ししたように、病院を変えたいと思って提案しても取り合ってもらえなくて、このまま終わってしまうのは嫌だと思っていたんですけれど、ある日の夜勤明けに昇ってくる太陽からエネルギーをもらった瞬間に、「ここから出て、自分がそういう病院をつくればいいんだ」と思って、一週間後に辞めたんです。

でも、そこからどうしたら建築家になれるかが分からない。皆か

らは随分心配されましたけど、とりあえずアメリカへ行けば何かあるぞと思って、サンディエゴの語学大学へ留学して現地の美しい建築物をたくさん見て回ったんです。学校で勉強するよりずっと多くのことを学べたと思うんですけど、帰国しても全く職はありません。

「なんでナースのあなたが設計者！」って、どこへ面接に行っても不採用の嵐で。そんな状況が続くと、私は世の中に要らない人間じゃないかって自分を否定してしまってますね。貯金も底を突いて、とうとう引きこもりになってしまいました。

菊間 それで、どうなさったんですか。

戸倉 気持ちを切り替えるために買い物に出掛けた帰りに、「インテリアコーディネーター募集」という張り紙が目に残ったんです。フルコミッション、出勤自由、経験無用、月収百万円も夢じゃないと書いてあって、「これだ！」と（笑）。その足で広告主を訪ねていったら、「じゃあ明日から来て」ということになったんです。

菊間 どんな会社だったのですか。
戸倉 中古マンションのリフォー

ム会社でした。「フルコミッション」って何か分からなかったんですけど、要は自分で仕事をとってきて、工事監督から集金まで全部一人でやるっていうのを、会社に行って初めて知りました（笑）。仕事を取らないとお給料はゼロなんですけど、どこも拾ってもらえるところがなかったのが本当にありがたかったですね。

最初に一週間ほど部長の鞆持ちをした後は、「一人で行ってきてください」と言われて、毎日不動産会社を回って経験を積んでいきました。最初は「あそこを測ってきて」と言われても、スケールの使い方すら分からないところからのスタートでした。

菊間 当時は大変だったと思いますが、最初からすべて学べて、結果的にはよかったのではないですか。

戸倉 ええ、そのおかげで独立できました。その代わり随分苦労もしました。

最初はどんな格好をしたらいいかも分からなくて、男性ばかりの工事現場にボディコンスーツで通っていたんですよ（笑）。「何しに来たの？」みたいな感じだったん

ですけど、こちらがお願いしたいことを熱心に伝え続けるうちに、皆さんだんだん真剣に耳を傾けてくれるようになって、いいものと一緒につくってくれる仲間みたいになっていったんです。

菊間 独立されたきっかけは。

戸倉 気がついたら仕事をすべて自分で完結できているので、だったら独立したほうがいいんじゃないかって（笑）。駆け出しの頃に門前払いされていた不動産会社の方々からも、誠心誠意やっていくうちに「独立するなら応援するよ」と言われるようになって決心したんです。

人に拍手しているだけの 自分でいいの

戸倉 菊間さんがアナウンサーから弁護士に転じようと決意された頃のこと、詳しく聞かせていただけませんか。

菊間 私がフジテレビに入社した頃は、三十歳を過ぎて画面で活躍する女性アナウンサーはほとんどいらっしやなくて、なんとかアナウンサー寿命を延ばすために他の人と違う武器を持つと考えたのがきっかけでした。ですから、

最初の目標は資格取得であって、弁護士になろうと思っていたわけではないんです。

もう一つのきっかけが、ヤワラちゃんこと谷亮子選手でした。彼女がオリンピックで二回目の銀メダルを取った時に、試合直後のインタビューで「次のシドニーに向けてまた頑張ります」と答えたのをテレビで観たんです。

戸倉 ああ、そうでしたね。

菊間 それまで八年間、とてつもない練習をしてきたのに金メダルに届かなくて、普通だったらすぐには次のことなんか考えられないと思うんですけど、彼女はまた四年頑張ると即答した。何て強い人だろうってすごく興味が湧いて、そこからシドニーまで取材をさせていただきました。



ナース時代の戸倉さん

そして、彼女が金メダルを取る瞬間を数メートル傍で見ることができて、それはもうあんなに感動したことはないって言うくらい感動しました。

でもその時、すごいすごいって拍手しながら、自分って何てダメなんだろうっていう思いも募ってきたんです。人に拍手してるだけの自分でいいのかな、私も何か一所懸命やらなきゃダメなんじゃないかなって。

戸倉 あの熱狂の中で、そんなことを考えていらっしやったんですね。

菊間 で、次のアテネオリンピックの取材も担当させていたいたんですけど、その時にシドニーの時から四年間、自分は何も行動を起こしていないことを痛感したんです。もちろん仕事は一所懸命やっているんですけど、オリンピックに出る人たちに匹敵するような人生を懸けた戦いや努力をしているわけではありませんでした。ただ日々仕事に追われて忙しくしているだけでいいんだろうかと、いろいろ考えるようになったんです。

そんな折にロースクールができて、夜間は四年コースだということからオリンピックと同じだと思っ、私も四年間オリンピック選手と同じくらい頑張ってみよう、自分で自分に拍手ができるくらい人生を懸けて勉強してみようって決意したんです。

そして勉強を進めるうちに、ただ資格を取って終わるのではなく、習得した知識を武器に、困っている人の役に立ちたいと思い始めて、弁護士を目指すようになりました。

どこまで自分を 追い込めるか

戸倉 アナウンサーの仕事をしなから司法試験の勉強をするのは、さぞかし大変だったでしょうね。

菊間 本当に変化でした。毎日三時間くらいしかベッドで寝られなくて、そのうちストレスで声が出なくなりました。このままでは体がもたないと思って休職も考えたんですけど、尊敬する弁護士の方から「何かを得るためにには何かを捨てなければいけない。弁護士という仕事は、あなたがいま抱えているものを捨てるだけの価値がある仕事だと思うよ」

と言われて、すべてを捨てて本気で挑戦することにしました。

戸倉 退路を断られたのですか。

菊間 そう、断ったからよかったんだと思います。どこかに逃げ道があると、人間って弱いからどうしてもそっちのほうへ流されてしまいますよね。

ただ、なかなか成績が上がらなくて、模試の成績が返ってくる度に落ち込みましたね。もし受からなかったら、この先の人生どうなるんだろうと考えると怖くて怖くて。当時は一人暮らしでしたから、このまま死んでしまっって「元フジテレビアナウンサー孤独死」って報道されたりしたら嫌だから（笑）、泣きながら、文字通り歯を食いしばって勉強しました。

もしあのまま働いてお給料をもらいながら勉強していたら、きっとそこまで必死になれなかったでしょうね。火事場の馬鹿力とはよく言ったもので、追い込まれたら、人って何でもできるんだなって思いました。

戸倉 自分に置き換えて考えてもその通りだと思います。ナースっていつでも戻れるんです。しかも給料もいい。なかなか

「自分でこの道に進むんだって心に決めたら、周りの声とか可能性とか、もうそんなことは気にならなくて、前に進むのみでした」



建築の仕事に就けなくて、貯金もあと数千円しかなくなった時、看護師の面接に行こうとしたことがあるんです。

あれは渋谷の雑居ビルに入っている透析のクリニックでした。ビルの階段を上っている時に、ナースの方が患者さんが食べた店屋物のどんぶりをそっと出すのが見えました。その途端に「あっ、ここに戻ってきてはダメだ」と思って、急いで階段を駆け下りたんです。その時からですね、もう後ろには絶対戻らないって心に誓ったのは、自分でナースに戻る扉を閉ざして、前だけ向いて進むことにしたんです。

す。

やっぱりどこかで自分を追い詰める時って必要ですね。それをやったらから神様が蜘蛛の糸を垂らしてくださって、建築への道がひらけたのかなと思います。

菊間 素敵なエピソードですね。自分でそれをやり切るんだという強い思いを持つことは大切ですね。私も自分でこの道に進むんだって心に決めたら、周りの声とか可能性とか、もうそんなことは気にならなくて前に進むのみでした。

きつとお客様がよくなるその確信を力に

菊間 独立後は、どのように会社を軌道に乗せてこられたのですか。戸倉 最初は自分のマンションの部屋を事務所にして、会社にいた時の仲間からお仕事をいただきながら、一つひとつお客様の信頼を積み重ねていきました。

そのうちあるお客様から「あなたはセンスがいいから、マンションを一棟全部デザインしてみない？」って言われたんですけど、そういう大きなお仕事を手掛けるようになると、自分の勉強不足を痛感するんです。打ち合わせで私の

デザインが構造上できませんって言われても、他の手立てを考える知恵がない。もっと能力が必要だと思って、二級建築士のライセンスを取り、さらにイタリアのミラノで二年ほど勉強したんです。

菊間 留学生生活はいかがでしたか。戸倉 毎朝早く起きて学校へ行った後、個人的に師事していた建築家のパオロ・ナーバさんの所へ車で三十分かけて行って、帰ってきてから課題をするんです。

当時はまだ製図はコンピュターではなくて、中古の製図板を買ってきて手で描いていました。ミラノの冬は寒くて、夜十時くらいになるとマンションの暖房がストップしてしまいうので、いつも震える手で線を引いていたんですけど、「なぜ真つすぐに線が引けないんだ！」って先生によく怒られました（笑）。

留学期間には限度がありますから、日本でも勉強できることには時間を費やさずに、とにかく感性を磨きたい、建築のルーツを学びたいと考えていました。それで校長先生に掛け合って、「じゃあ蓉子のために」って特別に教育プログラムをつくっていただいたのはよかったんですね。

朝六時に起きて、一日十六時間勉強して、夜十二時には寝る。その生活を、試験に落ちた翌日から二回目の試験が終わる日まで愚直に繰り返しました。

戸倉 生活のリズムを一年間崩さなかったんですね。

菊間 そうですね。一緒に試験に挑戦していた素敵な仲間たちもいたので、自分一人だけ落ちてその関係を壊したくないという思いもありました。一秒たりとも司法試験以外のことは考えない。それくらい自分を追い込みましたし、そういう環境に自分を追い込んだら、受かることができたんだと思います。

当時の私はまだ結婚もしてなくて自分のやりたいようにできたのもよかったです。受験勉強中に子供を二人も産んで受かった友人もいますけど、私は自分のことだけ考えていけばいいんだから楽。受からないと申し訳ないなあって。

戸倉 菊間さんとは全然レベルが違いますけど、私はイタリアから帰ってきた後に一級建築士を、昨年宅建の資格を取りました。一級建築士に挑戦した時は四十も近か

かったですね。それから、パオロ・ナーバさんのもとで勉強できたことも大きかったです。

戸倉 日本で講演をなさった時に、たまたま会場で歩いていらっしやるのを見かけて、こちらからお声掛けしてご住所を伺っておいたんです。向こうで会いに行ったら、「何か役に立てることはありませんか？」とおっしゃるので、経験を積みたいので一緒に働かせてほしいとお願いました。学校の勉強だけでなく、現地のリアルな仕事の現場を見て、イタリアの素晴らしい感性を学びたかったです。

イタリアの建築家というのは、哲学者であり思想家でもあって、ただ設計するだけでなく、自分のつくるものでいかに人の役に立つか、社会をどう変えていくかを考えながら仕事をするんです。線をつくらなければ意味があるし、何をつくらなければ相手は幸せになるんだらう、街は綺麗になるんだらう、社会はよくなるんだらうって徹底的に議論するんです。向こうでそういう大切なことを学べたことは

ったし、この先少しでもたくさん仕事をするために絶対に一回で取るぞと思っただけで、無事合格しました。宅建は一昨年落ちて昨年受かったんですけど、落ちた時に合格に二点足らず悔しい思いをしたので、次はすごくいい成績で合格できるように頑張りました。

どちらの試験の時も、趣味とか友達に会う時間とか、後でもできることはすべてストップして勉強に専念したのがよかったですね。

菊間 この日だけはいいやって何か予定を入れると、絶対にその時間だけじゃ済まないんですよ。それについて友達とラインのやり取りがあったり、前後に他のことがジワッと広がって、勉強する体制が崩れていきますから。やっぱり何も他の予定を入れないで、勉強に思う存分時間を使えるようにしておかないとダメだと思えます。

心に残る仕事

戸倉 弁護士になられて、特に印象に残っている仕事はありますか。菊間 メインは企業法務なので、たまに担当する個人案件は一件一

特集 志ある者、事竟に成る

本当に大きかったですね。

そうして一九九九年に帰国して、社名を「ドムスデザイン」に変更して仕事を再開しました。この社名は留学中にクラスメートがロゴまでつくって考えてくれたんですけど、「ドムス」にはラテン語で「家」という意味があります。

菊間 素敵な社名ですね。その後のお仕事は順調でしたか。戸倉 逆境はいっぱい経験してきました（笑）。

帰国後、最初にご依頼をいただいた戸建ての家は、すべての建材をイタリアから持ってきてつくってという壮大なプロジェクトでした。イタリア留学の集大成と想って臨んだんですけど、いざ見積もりを取ってみたら予算の二倍くらいに膨れ上がって、お客様が他のハウスメーカーに変えると言い始めたんです。すぐイタリアへ飛んで再交渉をして、ご納得いただけるとの連絡がきました。そういう冷や汗の出るような体験は何度もしました。

それでも、最後にはお客様がよくなるっていう確信があるから頑張れるんです。建築ってその方の人生をつくるものだと思うんです。

ね。もっといい人生にバージョンアップしていただくためにも、諦めないでコミュニケーションを重ねていく。そうすると、あなたの言う夢に懸けてみようって決断してください。ですから最後の決め手になるのは、お金じゃなくって信頼関係なんですね。

目標に専念できる環境に自分を置くこと

戸倉 菊間さんほどのようにして難関の司法試験に合格なさったんですか。

菊間 特別なことはしていません。一回目は勉強時間が十分ではありませんでした。たぶん受からないだろうと思って、合格発表の前日までテキストは一切開かず、南の島に行って、海にぶかぶか浮かびながら心を整理しました（笑）。不合格発表の翌日朝六時から勉強を再開したんですけど、毎



「やっぱりどこかで自分を追い詰める時って必要ですね。それをやったから神様が蜘蛛の糸を垂らしてくださって、道がひらけたのかなと思います」

件すごく思い出に残ります。

少年事件で弁護した少年が、後で事務所へ挨拶に来てくれた時は嬉しかったですね。弁護士にならたての頃に受け持ったDV被害に遭っていた女性は、離婚調停をしようと思っていた矢先に相手が亡くなってしまおう等、大変な状況がいくつも重なったんですね。傍で寄り添うことしかできなかつたんですが、とても感謝してくださいました。その時に弁護士として貴重な経験ができた。傍にいてあげて相手を支えて差し上げることができるとは、依頼者のためにしっかりとやらねえと！と強く思いましたね。

その方がちょうど昨年末にご挨拶に来てくださったんですけど、いまはお孫さんもいて、とても幸せそうな笑顔をなさっていてよかったなと思いました。そんなふうに、弁護士の仕事って解決をして終わりにじゃなくて、ずっと続くんですよ。常に複数の案件を抱えていますから、一件解決してもあまり喜んでる余裕はないんですけど、そうやって弁護した方が後で会いに来てくださったりすると、ジワッとくるものが

ですから志というのは、最初にバシッと掲げるといよりは、どこまで本気で自分を磨き上げようかと考えるかどうかと思うんです。そこに志もついてくると、懸命に自分を磨く中で気がついたら到達しているものではないかと私は思うんです。

菊間 私は、アナウンサー時代に大きな事故に遭いました。テレビに出演している最中にビルの五階から落ちて、骨を十三本も折ったんです。中でも一番危なかったのが第一腰椎の圧迫骨折で、一歩間違えたら二度と歩けなくなるところでした。戸倉さんのいらっしゃっ

ありますね。

戸倉さんは、何か転機になった仕事はありますか。戸倉 十年ほど前に手掛けた高崎の黒沢病院がそうでした。私たちの仕事って、クライアントさんと思いが一緒でないといけないんですね。でも理事長の黒澤先生は、これからの病院はテーマパークのようにあるべきだという思いを持たれていて、私の理念とピッタリ一致するお仕事ができたんです。

そこから侃々諤々議論を重ねてつくったのが、街をテーマにした病院でした。病院の廊下は長いので、ミモザ通りとかラベンダー通りといった名前をつけて、それに色彩も合わせたり、敷地内に温泉を掘ったり、スポーツ施設を設けたり、まさしくテーマパークのような病院ができたんです。宿泊棟は「世界を旅する」というコンセプトで、ミラノの部屋、パリの部屋、ロンドンの部屋というふうに十九床全部内装もカーテンも変えました。「病院らしくない病院」ということで話題になってメディアにも取り上げられ、私の仕事を病院のほうへ大きくシフトするきっかけにもなりました。

た慶應病院に入院して、リハビリに二年かかりましたけど、幸い手術もせず完治できたんです。

人間って、一回死ぬような目に遭うと開き直るっていうか、人生観が変わって頑張れることを実感しています。

戸倉 無事に復帰できて本当によかったですね。菊間さんはすごく運に恵まれていらっしゃるというか、守られた方なんだと思います。菊間 入院中は励ましのお手紙をたくさんいただいたんですけど、いまでも大切にしているのが、大學生の女の子からもらったお手紙でした。彼女は高校の時、チアリーディングをやっている時に怪我をして、私と同じ第一腰椎を骨折してしまいました。私は五階から落ちて後遺症も残らなかったのに、彼女はほんの二メートルの高さから落ちて一生車椅子で生活することになったんです。

その頃の私は、何で私がおんな目に遭わなきゃいけないんだってあらゆるものに八つ当たりしていたんですけど、彼女がそのお手紙に「菊間さんは治るって聞きました。復帰されるのを楽しみにしていますから頑張ってください」っ

とにかく患者さんに楽しんでほしい、健康になってほしいという思いでデザインしたんですけど、黒澤先生は、その成功を踏まえて二棟目も建設され、実際に高崎市の生活習慣病罹患率も減っていて、病院のデザインを変えることで健康になったり、病気になる人が少なくなることが明らかになってきたんです。本当にやってよかったと思っています。

一所懸命生きることが生かされた自分の務め

菊間 戸倉さんも私も、自分の立てた志に向かってきょうまで一途に歩んでこられたのはとても幸せなことだと思いますけど、大切なのは自分をよく知ることではないでしょうか。

生まれた瞬間から亡くなるまで一番自分に寄り添っているのは自分自身であって、自分のことを一番知っているのは自分だと思えます。でも意外と皆さん自分のことを知らない。自分がどんなことで喜んだり、落ち込んだり、やる気を起こしたりするのか。そういうのは自分と対話を重ねる中で自覚していくことだと思うんです。

て書いてくれているのを読んで、とても恥ずかしくなりましたし、頑張らなきゃいけないって思いましたね。

戸倉 そうだったんですか。菊間 改めて振り返ってみると、アナウンサー時代に、日々、災害や事件等で亡くなる方の報道をする中で、なぜその方たちは亡くなって、私は生き残っているんだらうって考えることも多かったです。ただ、これはいくら考えても答えなんて出ません。

最終的には、なぜか分からないけれど、生かされている以上、一所懸命生きないと、志半ばで亡くなった方々に失礼だと思いに至りました。ダラダラ生きていちゃいけないし、決めたことはしっかりとやり遂げる。それが亡くなった方への私なりの敬意の表し方で、志ってそういうところから生まれてくるのではないかなという気がしています。

戸倉 おっしゃる通りだと思います。私もナース時代に子供たちの死を間近に見てきました。その時救えなかった命のために何か自分ができることはないかという気がして、ようにならなくていいかなって思っています。

ど、それをしないで、人の意見とか、社会の目とか、マスコミの情報とかに踊らされると、自分の本当の思いとブレが出てきてしまうのではないかと思っています。

志というのは、自分ときちんと向き合っていれば、どんな人にも必ずあるはずだと思います。いまの世の中は情報が多くて惑わされることが多いけれども、自分としっかり対峙して努力を続けていくことが大事ではないかと思っています。戸倉 人間は誰でもダイヤモンドの原石を持っていると思うんです。その原石は自分しか磨いてあげられないのに、原石を持っていることすら気がつかないで、よそに幸せを探しに行ったり、年齢を言い訳にして諦める人が結構多いと思っていますね。

しっかりと志を持てるかどうかは、その人がどれだけ輝きたいかに懸かっていると思います。すごく輝きたかったら目標も高くなるし、時間の使い方も変わってきますよ。自分の立てた志によって毎日の生き方が自ずと決まってくるし、その志が高ければ高いほど、一瞬一瞬を大事に生きると思っています。

命さえ取られなければ事業でどんな苦労をしても苦労じゃないって思えるんです。生きてさえいたら何でも乗り越えられるぞって。菊間 そうですよ。私は司法試験の勉強中に、落ちたらどうなるんだらうって不安になった時、アナウンサー時代のこの事故のことを書いた自分の本を読み返していたら、感動して泣いてしまいました(笑)。二十代の自分がこんなに頑張ったんだから、三十代の私も頑張らなければ、過去の自分に励まされたんです。生きるか死ぬかの瀬戸際を乗り越えたことに比べれば、別に司法試験に落ちても死ぬわけじゃないさって。

きっとこれから辛い局面にぶち当たっても、同じように過去の自分が励ましてくれる気がします。過去から現在、未来って繋がっていますからね。

逃げずにとことん向き合って乗り越えることで、自信もつくし、自然と次に繋がっていく気がします。命があれば、健康があれば何だってできる。これからのその気持ち忘れずに、自分の志に向かって努力していきたいですね。戸倉 お互いに頑張らましよう。